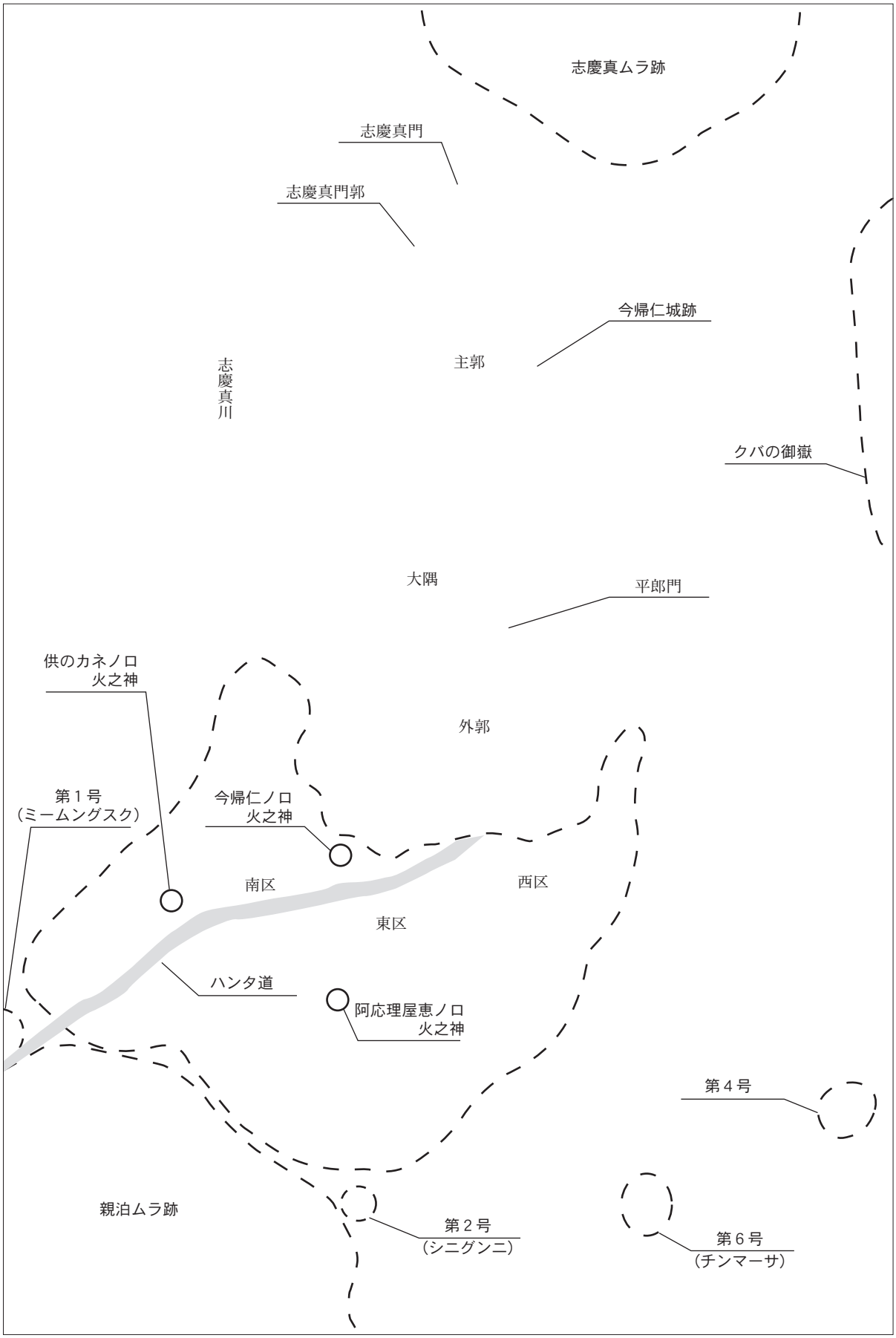
今帰仁村文化財調査報告書第24集

今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ

－村内遺跡発掘調査報告－

2007年　3月

沖縄県今帰仁（なきじん）村教育委員会


志慶真ムラ跡
志慶真門
志慶真門郭
今帰仁城跡
主郭
志慶真川
クバの御嶽
大隅
平郎門
供のカネノ口
火之神
外郭
第１号
（ミームングスク）
今帰仁ノ口
火之神
南区
西区
東区
ハンタ道
阿応理屋恵ノ口
火之神
第４号
親泊ムラ跡
第２号
（シニグンニ）
第６号
（チンマーサ）

巻頭図版　空から見た今帰仁城跡と今帰仁城跡周辺遺跡（北から南）

はじめに

本報告書は平成16年度から平成18年度までの「村内発掘調査事業」に伴って実施された今帰仁城跡周辺遺跡の範囲確認調査報告書であります。

本村には国指定史跡今帰仁城跡が所在しております。これまで今帰仁城跡の整備事業を昭和55年度より進めてきました。史跡の指定面積は約7.9haで、この広大な地域を年次毎に調査と整備を進めております。その中で2000年12月には本村の今帰仁城跡を含む県内９遺産とともに、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として今帰仁城跡が世界遺産登録されました。

世界遺産の登録にあたっては、今帰仁城跡周辺25.3haを景観保全地区として保護しております。この景観保全地区内には今帰仁ムラ跡をはじめとした集落遺跡やミームングスクなどの石積遺構、あるいは拝所や御嶽といった精神生活と密接に関わる様々な文化財が密集して所在しています。しかし、これらの遺跡の詳細については不明な点も多くあります。埋もれているこれらの遺跡に光を当てたのは皮肉にも、今帰仁城跡の便益施設として設置された駐車場工事などに伴って実施された緊急発掘調査によるものでした。これによって今帰仁城下の集落の実像が解ってきております。

そこで、今帰仁村では今帰仁城跡周辺地域が史跡今帰仁城跡と一体となる文化財として保護・活用を図ることを目的に、遺跡の内容確認を第一の目的として３年間調査を行ってきました。この調査によって発掘された遺跡の多くは保存状態が良好で、村としても今後史跡として追加を目指す地域であると考えております。

最後に、これまで調査にあたっては貴重なご指導を賜りました文化庁文化財保護部記念物課、沖縄県教育委員会文化課、県立埋蔵文化財センターをはじめ、調査を指導していただいた今帰仁城跡調査研究整備委員の先生方に心から御礼申し上げます。

平成19年３月

今帰仁村教育委員会
教育長　田港　朝茂

例　言

1．本書は平成16年度から平成18年度に実施された「村内遺跡発掘調査事業」に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告及び分布調査報告である。

2．遺跡名称である「今帰仁城跡周辺遺跡」は今帰仁城跡周辺地域に点在する遺跡及び文化財の総称である。本調査の中心となったのはこの遺跡群の中でも今帰仁城跡とならんで中核を成す「今帰仁ムラ跡」で、今帰仁ムラ跡は今帰仁城跡の北西側緩斜面、沖縄県今帰仁村大字今泊小字ハンタ原5100番地一帯に立地している。遺跡名である「今帰仁ムラ」は旧今帰仁邑と推定される集落遺跡で、「今帰仁ムラ跡」と呼称する。このため、今帰仁城跡周辺遺跡という場合は今帰仁城跡周辺に所在する遺跡の総称として、今帰仁ムラ跡とする場合は、今帰仁城跡北側に立地する集落遺跡の部分を限定して呼称している。

3．本事業において発掘調査を実施した地点は今帰仁ムラ跡東区１区、７区及び西区屋敷地５における試掘調査（約216㎡）である。また、これ以外にも参考となる遺跡や構造物または、周辺遺跡に附帯するように展開する祭祀遺跡などの調査についても遺跡全体を理解するために適宜調査を行った。

4．発掘調査は今帰仁村教育委員会によって実施された。

5．本文中で使用した引用・参考文献は各節末に掲載した。

6．本書の作成にあたっては、今帰仁村教育委員会文化財係が担当し、発掘調査アドバイザー金武正紀氏の指導のもと、宮城弘樹、玉城靖、与那嶺俊、具志堅亮、仲里なぎさが中心になり、分担執筆を行った。編集は宮城が行った。

7．本報告の脊椎動物遺体は樋泉岳二氏に、貝類依存体は黒住耐二氏に、サンプリングした土砂のフローテーション法によって得られた炭化種子は高宮広土氏にそれぞれ分析を依頼した。他にも石器等の石質については神谷厚昭氏に鑑定を依頼、出土した人骨資料については土肥直美氏に所見をいただいた。また、今帰仁城跡周辺の集落遺跡や、今泊現集落については高橋誠一氏よりご指導いただいた。合わせて、遺跡の総合的な理解や史跡としての追加するべき重要な地域などについては、今帰仁城跡調査研究整備委員会の安原啓示、冨田裕次、赤嶺和雄、上原靜、渡辺美季の各氏よりご指導をいただいた。

8．現地での写真撮影は、金武、宮城、玉城、与那嶺が担当した。

9．出土遺物と発掘調査に係る資料は全て今帰仁村教育委員会において保管する。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と歴史的環境（宮城弘樹）
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 4
　第３節　民俗的環境 …… 8

第Ⅱ章　調査に至る経緯と概要（宮城弘樹）
　第１節　調査に至る経緯 …… 11
　第２節　調査組織 …… 12

第Ⅲ章　発掘調査の経過と概要（宮城弘樹）
　第１節　調査地域の概観 …… 14
　第２節　発掘調査の経過 …… 16

第Ⅳ章　報告方法の整理（宮城弘樹）
　第１節　踏査と試掘調査 …… 21
　第２節　基本層序 …… 23
　第３節　地区割 …… 25
　第４節　出土遺物の整理と報告 …… 27

第Ⅴ章　報告（宮城弘樹・玉城靖・金武正紀・与那嶺俊・具志堅亮・仲里なぎさ）…… 28
　第１節　今帰仁ムラ跡 …… 30
　第２節　親泊ムラ跡 …… 136
　第３節　志慶真ムラ跡 …… 137
　第４節　大川原遺跡 …… 138
　第５節　親泊原遺跡（旧称アカン墓遺物散布地） …… 141
　第６節　今帰仁原遺跡 …… 145
　第７節　今泊海岸陶磁器散布地 …… 146
　第８節　石積遺構群 …… 148
　第９節　ハンタ道 …… 159
　第10節　今泊の伝統的集落 …… 164
　第11節　その他 …… 167

第Ⅵ章　結　　語
　第１節　今帰仁城跡と今帰仁ムラ跡の発掘調査の意義（金武正紀）…… 181
　第２節　琉球における集落景観の変遷と今帰仁城をめぐる集落（高橋誠一）…… 203
　第３節　今帰仁城跡出土元青花瓷の研究（亀井明徳ほか）…… 227
　第４節　今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群（樋泉岳二）…… 253
　第５節　今帰仁城跡周辺遺跡から得られた貝類遺体（その2）（黒住耐二）…… 283
　第６節　今帰仁城跡周辺遺跡出土の焼土塊について（具志堅亮）…… 291
　第７節　今帰仁城跡周辺遺跡出土の植物遺体（高宮広土）…… 301
　第８節　総　　括（宮城弘樹）…… 310

付　表（出土遺物観察表）…… 172
図　版 …… 313

第Ⅰ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　地理的環境

沖縄島は九州島から南に南北約1,000㎞に180の島々が弧状に点在する島嶼群（＝南西諸島）の一つである。その南西諸島のほぼ中央に沖縄本島が位置する（第１図）。東を太平洋、西は東シナ海に面する洋上に浮かぶ。近海を黒潮が流れ、海洋性、亜熱帯の島として豊かな自然に恵まれている。沖縄島は南西諸島の島々の中、最大面積の約1,182㎢の島である。

今帰仁城跡はこの沖縄島にあって、行政区は今帰仁村に所在する。今帰仁村は沖縄本島北部、本部半島の北側に所在する人口約9,500人の自治体である。本島北部地域一帯は中南部に比して全体的に山地主体となっているため「山原（やんばる）」と呼称されており、沖縄島の最高峰与那覇岳も国頭村にあって498ｍを計る。この山がちな山原にあって、今帰仁村の地形構成は丘陵に比して石灰岩台地、段丘や低地の面積が比較的広く、農作物に適した土地であることから、地目における田･畑地の面積が2.4㎢（村全体の面積の36％）と広い面積を誇っている（与儀1975)。やんばる地域の拠点となったグスクが、本部半島北側地域に立地した要件の一つに、今帰仁村域の広い耕地が背景にあったことが想像される。現在でも今帰仁村は、農業中心の産業構造を有する農村である。

さて、今帰仁城跡は今帰仁村の中でも西端、字今泊に立地している。城跡の立地する丘陵は標高約100ｍを計り、丘陵頂部の主郭・御内原からの眺望は広く、北に伊平屋・伊是名島、晴れた日には与論島を望むことができる良所にある。本部半島の地形的特徴は概して山地部にみられる今帰仁層・本部層（与那嶺層）という中生代初期頃に堆積した地層群と、低地・海岸部にみられる琉球層群の２つのブロックに大別される。今帰仁層群は中生代三畳紀に堆積した地層で、今帰仁城跡の立地する丘陵一帯から本部町の大堂･浜元付近までの地域に広がっている。特に今帰仁城跡の立地する北西部には、結晶化が進んで硬質、厚さが平均して20㎝前後で割れやすい特徴の層状石灰岩が基盤岩となる（氏家1996）

本調査地区である今帰仁城跡周辺遺跡の今帰仁ムラ跡は､今帰仁城跡の北側緩斜面標高約75～85ｍを測る地域に立地する。今帰仁ムラ跡は今帰仁城跡周辺遺跡として総称する遺跡群の一つで、特に今回調査地となった地域は今帰仁城跡に隣接する集落遺跡である。調査地域一帯も今帰仁城跡同様基盤岩は中生代三畳紀に堆積した地層で今帰仁層群のそれと同じである。

次に、今帰仁ムラの周辺地域の地質･地形的な特徴について見ていく。先に述べたように今帰仁城跡は標高100ｍの丘陵に立地している。この丘陵は今帰仁層群と呼ばれる硬質の石灰岩を基盤としている。今泊を南北に流れる志慶真川の谷間を軸として城跡側には今帰仁層群が、その対岸側には粘板岩、千枚岩を優勢とする地層が分布する特徴的な地質構成を示している。今帰仁城が層状石灰岩を積み上げて城塞として整備したことを考えると、川一つ越えた場所で基盤岩が異なる点は築城の事由として石灰岩丘陵が選択されたことが十分に想定される。この丘陵の北側の麓部分、あるいは丘陵の外縁の前田原やシュク原などの海岸に近い小丘には琉球層群が認められ、方言で丘を意味するモーやムイと呼ばれる丘が、里山的な景勝地として住民から親しみをもって標榜となり、今も生活と密接に結びついている。今帰仁ムラ跡周辺の水系は西側にタキンチャガーラ、東側に志慶真川が流れ両者が谷地を形成しているため、谷地に挟まれた丘陵に今帰仁城跡が、その緩斜面に今帰仁ムラ跡が立地する恰好となる。河川はいずれも東シナ海に注ぎ大きな河口をつくっていて、特にタキンチャガーラの河口は「ナートゥ」、志慶

真川とナハガーラの両河川が作り出す河口が「ナガナートゥ」と呼称され、いずれもナートゥ（湊・港）という地名が付されている。この両河口に挟まれるように展開する海岸沿いに、字今泊の現集落が展開している。今泊はかつて親泊と今帰仁の二つのムラが合併した経緯があり、両ムラより一字ずつ取って今泊としている。前者「親泊ムラ」の親泊も泊地名であることから海岸線に選地して港町としていた様子を想起させる。また、親泊と言えば那覇港の別名も親泊であり、その語彙は「御」と「泊」が指摘される。

今泊の水源は上述した河川以外にも湧水や井戸が知られる。『今泊誌』に記された井戸は51を数え豊富であるが、いずれとも近世・近代以降の構築であったと考えられ古い水源は湧水に頼ったと推定される。特に親川（エーガー）やナグーガーは今帰仁ムラ跡よりハンタ道の旧道をちょうど下りきったところにあり、かつてはこの親川の湧水点一帯の低地（大川原・新田原）が沖積地となり、湿潤な田地として利用されていたようである。その様子は昭和30年代頃まで見ることができるため、当地を訪れた宣教師メルビン・ハッキンス氏によって撮影された写真が当時の風景を伝えてくれる（仲原ほか2002）。この他にも1944年に撮影された米軍の航空写真は当時の田地の開発や土地利用を考える上でも参考となる。現在では30年代後半からさとうきび作に代わり、昭和62年より土地改良が実施され既に整備が完了している。

一方、海岸部の景観は広いイノーと砂丘を備えている。イノーは低潮時に干上がる岩礁帯の干潮（ピシ）と島の間の浅瀬の海域を指し、本部町の備瀬から今帰仁村の崎山集落あたりまでの海岸は幅広いイノーが広がっていて遠浅の海となる。イノーでの漁労活動は現在でも頻繁に行われており、特に潮位の関係から３～５月の昼間、11～１月のイザリ漁が知られている。このため人の活動の範囲を伺うように海岸には様々な地名が附されており、生活と密接に関わった様子を知ることができる。この浅瀬帯も志慶真川の河口ではクチといわれるサンゴ礁の発達しない深みがあって、ここがそのまま舟の航路として津口となり利用されたと目される。実際に河口近くには、現在の船着き場が所在するとともに、津屋口（チェーグチ）墓の別称を持つ墓もこの船着き場近傍に所在する。この本部半島の北側海岸には長さ１㎞に満たない小さな砂丘が丘や崖、岩場などで区切られ点在しており、遺跡の所在する今泊には５つの海岸砂丘がある。西からシバンティナ浜、パマンクワー、シル浜、クビリ浜、カネシ浜と呼ばれる。また、集落の東と西に発達した海岸線沿いの石灰岩崖はミーモー、キヌガンファーイと呼ばれ海を眺望するのにも適している。現在でもスク漁の際はここから魚を望む格好の場所となる。

本部半島に限らずこのような海岸一帯の景観や土地利用は島嶼部における生活の中で極めて重要な要素で、グスク時代生活史の解明において、周辺地域の地形及び景観を復元することが有用であることは言うまでもない。

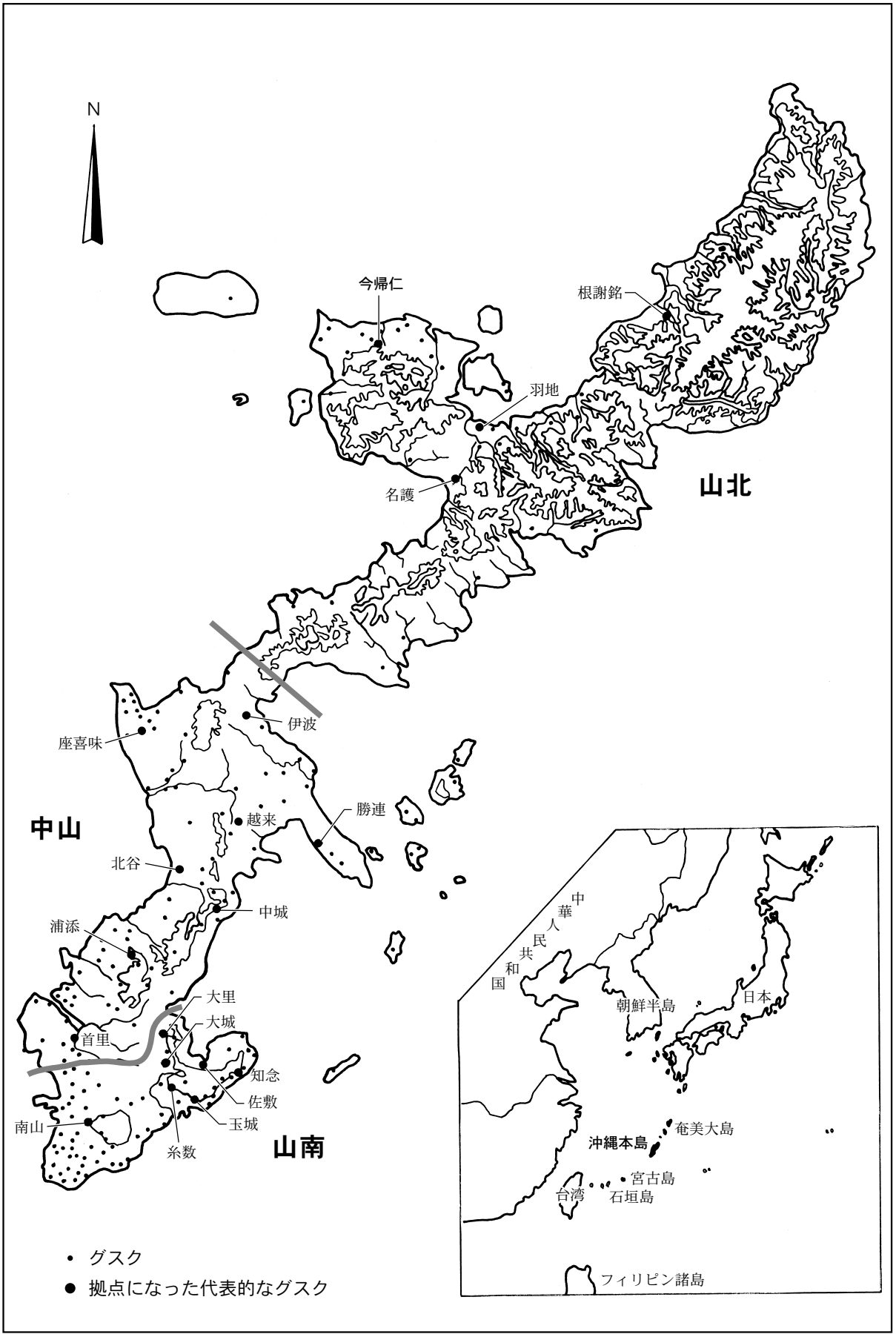
参考文献

与儀銀一　1975年「地誌概要」『今帰仁村史』今帰仁村役場

氏家宏　1996年「琉球弧基盤の生い立ち　琉球列島の地誌Ⅰ」『日本の自然』8〈南島の島々〉岩波書店

仲原弘哲・ほか　2002年『なきじん研究』〈－写真に見る今帰仁－歴史散歩－〉　今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター

今泊誌編集委員会　1994年『今泊誌』今泊区公民館



第１図　今帰仁城跡位置図

第２節　歴史的環境

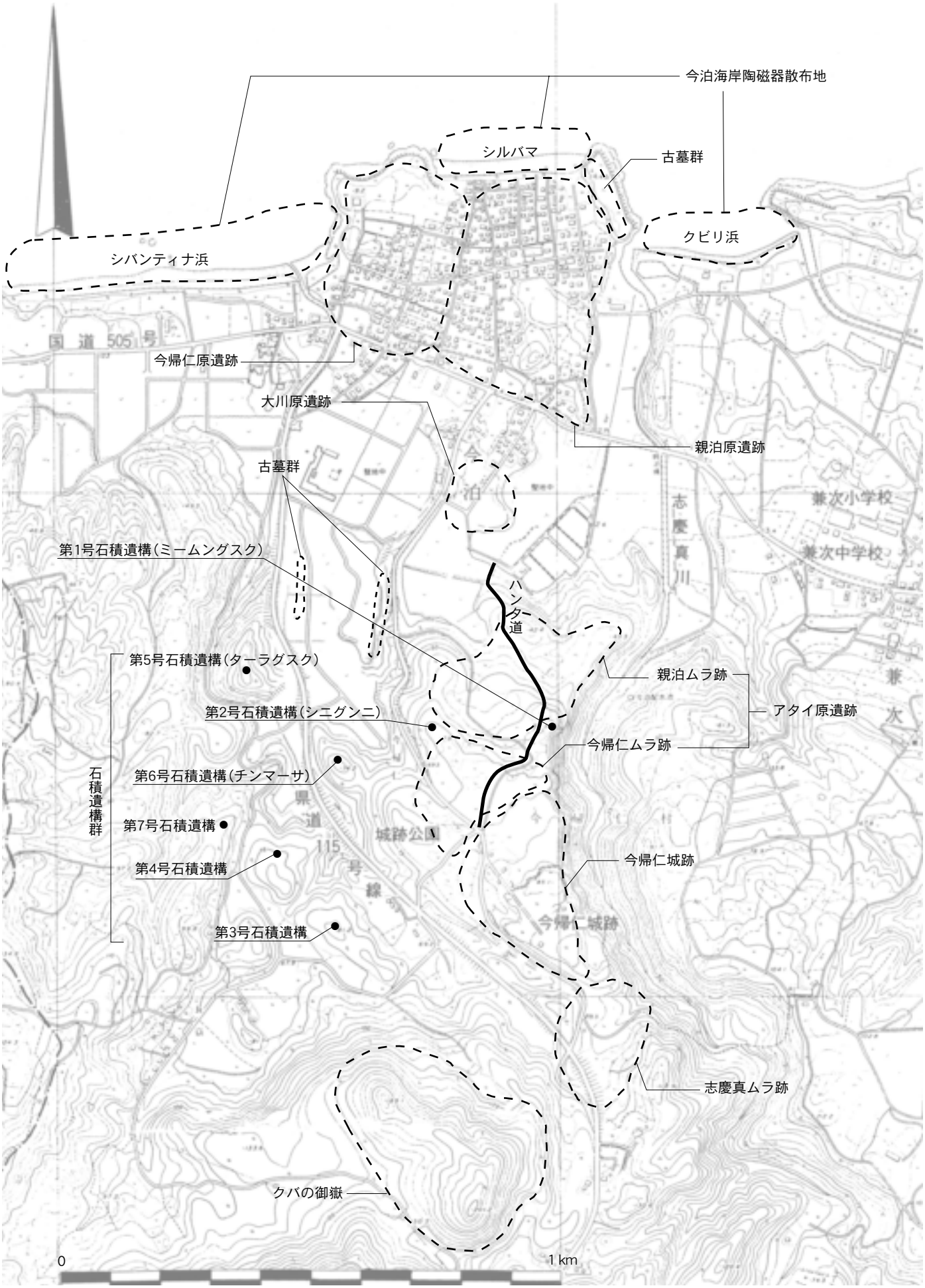
村内にはおよそ40余の先史遺跡が確認されている（上原ほか1984）。現在知られる村内で最も古い遺跡は沖縄編年前Ⅳ期（縄文時代後期相当）に位置づけられる運天貝塚や古宇利原Ａ遺跡などがある。先史遺跡の多くはどれも海岸線沿いに点在し、本格的に内陸部に人が展開するようになるのはグスク時代からのようである。

今帰仁城跡周辺遺跡は今帰仁城跡の城外に展開する集落遺跡、拝所、御嶽、石積み遺構など今帰仁城跡を中心に周辺地域に展開する関連遺跡群の総称である（第２図）。中心となる今帰仁城跡は今帰仁村大字今泊小字ハンタ原に所在し、（史跡指定）面積は7.9haの広さを持つ大規模なグスクである。前項で詳述したとおり最高所の標高は約100ｍとなり、石灰岩の丘陵上に位置する。丘陵の頂上部が主郭、大庭、御内原となり、その東は落差70～80ｍの深い渓谷をつくる天然の要害となる。東側の谷筋は志慶真川が蛇行して流れ、西側の谷筋はタキンチャガーラが流れ東シナ海に注いでいる。御内原の郭に立つと志慶真川の渓谷を脚下に、遠くは伊是名島、伊平屋島、伊江島の城山、古宇利島を望み、晴れた日には遠く与論島を眺望することができる。今帰仁城跡の城壁は立地する基盤岩の古期石灰岩で構築されており、灰色の硬い石を積み上げた石垣で、県内の多くのグスクが白い琉球石灰岩の石垣で築かれるがこれとは雰囲気が異なる。石垣の総延長は約1.5㎞を計り、屏風状に曲線的に積み上げられている。城壁で囲まれた空間は先の主郭・大庭・御内原以外にもカーザフ、大隅、外郭、志慶真門郭など概ね10の郭からなり、石畳や石段で各郭は結ばれている。

歴史的に今帰仁城については、琉球が三つの勢力に分かれていたいわゆる三山鼎立時代に山北(北山)として、中国明代に琉球国中山王、山南王とともに記録に登場する。これまでに確認されている史料をたよりに概述すると、最古史料の一つに『明実録』があげられる。太祖實録巻一五八・洪武一六年一二月庚午朔（1383年12月15日)「琉球國山北王帕尼芝、遣其臣摸結習、貢方物。賜衣一襲。」と記され、山北王「帕尼芝」の名称が記述されるのを似って嚆矢とするようである。以後記録によれば、最初の1383年から最後の1415年の33年間に山北王帕尼芝が６回、山北王珉が１回、山北王攀安知が11回、中国皇帝へ使者を送り朝貢貿易を行ったことが記されている。この時代山北は沖縄北部地域と奄美大島近隣まで領域として支配していたとされる。

しかし、その山北（攀安知）も本島内で急速に勢力を拡大する中山王尚巴志によって1416年(1422年の和田説もある）に滅ぼされてしまう。中山の山北平定後、城地には中山によって中山王の子弟や重臣を山北監守に任じ、沖縄本島北部やんばる地域を管理している。それは1665年に監守体制が廃止されるまで続く。この間のことを監守時代と呼んでいる（仲原・ほか1993)。この監守時代の間、1609年には薩摩軍によるいわゆる琉球入りがあり、今帰仁城に立ち寄っていることが従軍日記「琉球渡海日々記」に記されている（村上1983・参照)。日記によれば「首里城へ向かう途中、運天港に停泊、親泊での和議が受け入れられず城へ放火した」とあり、実質的な廃城は監守引き揚げよりも早い、1609年頃にあったと考えられる。

さて、この今帰仁城跡の周辺には「シニグンニ」「ミームングスク」「ターラグスク」と呼ばれる石積遺構が存在し、これらはいずれも城跡に関わる施設と考えられている。また同様に城跡の南側の緩斜面には志慶真ムラ跡が、北側緩斜面には今帰仁ムラ跡が立地し、今帰仁城の城下町的な集落として展開していたことが伝承されている。特に今回の調査地域と一体となる北側今帰仁ムラ跡には石囲遺構が確認され、今帰仁城が機能していた頃の時代に相当する遺物が採集されることから、城跡と関わりの深い集落跡の可能性が指摘されている。地下に遺存する遺構や文献記録、伝承以外にも集落の故地を伝える好例として、周辺地域には「今帰仁ノロ殿内」



第２図　今帰仁城跡周辺遺跡分布図（Ｓ＝1/10,000）

「阿応理屋恵(オーレ)御殿」「供のかねノロ殿内」の各「火之神の祠」などの祠（拝所）が点在しており、これらは現存するノロ御殿・殿内の故地と考えられている。

以上のような経緯を辿る山北・今帰仁城も監守制度の廃止後は手つかずのままになっていたようであるが、1749年には山北今帰仁城監守来歴碑の建立、乾隆７年(1743)の検地があり（『具志川家家譜』所収)、大正末年には鎌倉芳太郎氏の来村調査などの記録（仲原1992）が残るのみで史料は散見的である。これを証明するように、これまで実施された今帰仁城跡の発掘調査でも近世期の遺物検出例は極めて少ない。しかし、記録や遺物の検出が無いといっても恒常的な生活空間として利用されていないというだけで、聖域とし村内外からの参拝者が訪れていたと推測される。現在も今帰仁城跡は「今帰仁上り」と称される県内多くの門中の参拝地として利用されており、今泊区が実施する祭祀においても年に数度神人を集め参拝したことが知られている。このような状況は今帰仁ムラ跡一帯に所在する拝所についても同様であったと想定され、グスク内の拝所とともに参拝されたものと考えられる。

また、明治14年（1881）に上杉県令、明治26年（1893）に訪れた笹森儀助（笹森1894)、大正末年に鎌倉芳太郎（仲原1990）らが訪れたことによってグスク周辺の景観について紹介するとともにその城下の様子についても記載しており明治～大正期のグスク周辺の様子を探ることも可能である（宮城1999)。

一方で、当該地域周辺の開発は戦前に今帰仁城跡への参詣道の整備（大正13年）などが行われた以外には、県内の多くのグスクに比べると先の大戦の戦火も免れ、現在までその姿をほとんど残しているといえる。しかし、戦後の復興期に参拝道の新設、旧県道115号線の新設等の諸開発行為によって城跡及びその周辺地が一部改変されたのも事実である。また、現在まで畑地として利用される一帯についても、重機による天地返しや掘削等によって地下に残ると考えられる遺構についても一部毀損していることは十分考えられる。

開発の経過は上述したとおりであるが、行政的には今帰仁城跡が昭和47(1972)年の沖縄の日本復帰と同時に国指定の史跡に指定され、昭和55(1980)年より今帰仁村が主体となって環境整備事業がすすめられている。この中で、平成12(2000)年には世界遺産として登録されたことによって、周辺地域が景観保全地区に指定され、歴史公園として活用されるために様々な整備が着手されるところである。

参考文献

上原靜・ほか　1984年『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10集　今帰仁村教育委員会

仲原弘哲・ほか　1993年『なきじん研究〈－今帰仁の歴史－〉』vol.3　今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター

仲原弘哲　1992年「鎌倉芳太郎氏ノート」『なきじん研究〈『すくみち』（第１号～16号)〉』vol.2　今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター

笹森儀助　1894年『南島探験』（東喜望校注1982年『南島探験』東洋文庫　平凡社より）

宮城弘樹　1999年「明治から復帰までの今帰仁城跡－整備事業を中心にして－」『今帰仁城跡環境整備報告書Ⅰ』今帰仁村教育委員会

村上仁賢　1983年「薩摩軍の今きじん通過記録①～⑩」『広報なきじん』87～96号　今帰仁村役場

時代区分			今帰仁城跡主な出来事	時代区分		日本の歴史事象主な出来事
先史	貝塚時代			古代	平安時代	1167年 平清盛、太政大臣となる(平氏政権樹立)
						1185年 平氏滅びる
古琉球	グスク時代	Ⅰ	13世紀末 今帰仁城の土地に人が住みはじめる。	中世	鎌倉時代	1192年 源頼朝、鎌倉幕府を開く
		Ⅱ期	1314年 この頃沖縄本島は山北、中山、南山の３つの勢力に分かれる。			
			1322年 帕尼芝、中北山を滅ぼし山北王となると伝わる。			1333年 鎌倉幕府滅ぶ
		第Ⅲ期 山北王時代	1383年 山北王帕尼芝、明国に使者を派遣し交易を行う(６回)。		南北朝	1338年 足利尊氏、室町幕府を開く
			1395年 山北王珉、明国と交易をする(１回)。			1392年 南北朝統一
			1396年 山北王攀安知、明国と交易をする(11回)。			1404年 明との勘合貿易始まる
			1416年 攀安知、尚巴志に滅ぼされる(一説には1422年)。			
	三山時代	第Ⅳ期 第一監守時代	1422年 尚巴志、次男の尚忠を山北(今帰仁) 監守として派遣する。		室町時代	
			1429年 南山王が中山に滅ぼされ、三山が統一される。			
			1440年 山北監守の尚忠が尚巴志を継いで王に即位する。 尚忠を継いで弟の具志頭王子が山北監守になったという。			
		第一尚氏時代	1469年 第一尚王統が滅び、山北の第一監守も離散する。 山北監守に大臣を交代で派遣する。			1467年 応仁の乱。戦乱が全国に広がる
		第二尚氏時代（前期） 第二監守時代（前期）	1490年 その頃、尚真王の第三子の韶威を山北監守に派遣する。		戦国時代	
						1543年 ポルトガル人、種子島に漂着(鉄砲伝来)
						1560年 織田信長、今川義元を討つ
						1573年 室町幕府滅ぶ
						1582年 信長死す（本能寺の変）
					安土桃山	1590年 豊臣秀吉全国統一
近世琉球						1592年 秀吉、朝鮮に出兵（文禄の役）
						1600年 徳川家康、石田三成ら、西軍を破る(関ヶ原の戦い)
			1609年 薩摩軍の琉球侵攻で今帰仁城は焼き討ちにあい克祉死亡する。 その頃、今帰仁村と志慶真村が城下に移動したため、今帰仁城内にいた山北監守(今帰仁按司)も城下へ移り住む。	近世	江戸時代	1603年 家康、江戸幕府を開く
			1665年 山北監守(今帰仁按司)は今帰仁から首里に引き揚げる。			1639年 鎖国の完成
		第二尚氏時代（後期） 第二監守時代（後期）	1742年 蔡温による今帰仁間切の竿入(御支配・検地)がなされる。 「今帰仁旧城図」が整えられる。			
			1749年 今帰仁城内に山北今帰仁城監守来歴碑記が建立される。			
						1825年 外国船打払令
						1853年 ペリー提督、浦賀に来航
						1860年 桜田門外の変
						1867年 大政奉還
						1868年 明治維新
		今帰仁間切時代（前期）				1871年 廃藩置県
近代沖縄	沖縄県	（後期）	1872年 琉球国が琉球藩となる。	近代	明治	1889年 大日本帝国憲法発布
			1879年 沖縄県となる。			1894~95年 日清戦争
			1882年 上杉県令今帰仁城跡を訪れる。			1904~05年 日露戦争
						1910年 日韓併合
		村政時代（前期）	1915年 今帰仁城跡の管理を今泊に委任する。		大正	1914年 第一次世界大戦
			1924年 北山城参詣道が完成する。			1923年 関東大震災
			1929年 北山今帰仁城趾碑建立される。			
			1930年 今帰仁城跡の入口に鳥居がつくられる。		昭和	1931年 満州事変起こる
						1937年 日中戦争起こる(蘆溝橋事件)
			1943年 北山神社の建設計画がなされる。城門からの道が壊される。			1941~45年 太平洋戦争
			1945年 沖縄戦、沖縄県は壊滅状態。アメリカ軍の統治下に置かれる。			1945年 ポツダム宣言受諾
戦後沖縄	アメリカ統治時代	村政時代（後期）		現代		1946年 日本国憲法公布
			1952年 旧正月二ヶ字住民総出で三日間、城跡の大隅を開拓して蜜柑の台木を1400本植える。			
			1955年 今帰仁城跡、記念物として琉球政府から指定を受ける。			
			1962年 今帰仁城跡、琉球政府から有形文化財の指定を受ける。			
			1962年 ~65年 琉球政府文化財保護委員会によって門(平郎門)から展望台までの石垣が修復される。			1964年 東京オリンピック開催
			1972年 本土復帰。今帰仁城跡、国の史跡として指定される。			1970年 万国博覧会、大阪で開催

第１表　今帰仁城歴史年表

第３節　民俗的環境

今帰仁城跡周辺遺跡（今帰仁ムラ跡）が集落として機能していた時代は今から500年前のことである。このため現在の土地利用や祭祀空間といった民俗学的情報を500年前の集落景観に直接結びつけることは困難である。しかしその一方で、グスク時代の景観の名残と思われる多くの民俗情報が大規模な開発を受けることなく今日まで残されているのも事実である。例えば今帰仁城跡やその周辺に所在する拝所には、今泊（旧今帰仁・親泊）をはじめ、具志堅（旧具志堅・上間・真部)、諸志（旧諸喜田・志慶真)、古宇利などの村落祭祀の重要な参拝地であるとともに、「今帰仁上り」と称される拝所・旧跡めぐりの重要な参拝地となっていることは先祖崇拝を精神的拠り所とする沖縄の観念と照らし合わせても重要である。即ち、今帰仁城跡周辺に点在する祭祀空間から遡り、文化的な伝統や、空間利用、景観の復元を行うことはグスク時代に営まれた集落のあり方や、検出される遺構を理解する上でおおいに参考となると考えられる。

本節では今帰仁城跡及びその周辺地域に点在する民俗的景観、特に参拝施設の分布とその伝承や利用者について事例紹介をしたい。

今帰仁城跡そのものは、今帰仁グスクとして周知される重要な参拝地である。このため、その城下のハンタ原、アタイ原にも多くの拝所が分布する。今回の調査地区である今帰仁ムラ跡にも拝所が点在している。祭祀を執り行う集団によって二つに分け概観する。一つは集落（字）を単位とする祭祀で、もう一つは門中を単位とする祭祀である。

1. 集落単位で行われている祭祀

字今泊では今帰仁ノロを中心として現在でも祭祀が執り行われ、ノロは仲尾次家がこれを伝承している。簡素化されており今では今泊区長・書記らとともに今泊区の安寧・繁栄・豊穣などをほぼ毎月祈願している。字今泊が行う年中祭祀では、現在第２表の行事が継承されている。字誌以外の記録からはこれよりも多くの行事が執り行われていたようである。

この他にも今帰仁城跡を参拝地とする集落は具志堅（本部町）や古宇利などがある。具志堅では、現在今泊区が行っていない年中祭祀であるシニグ祭りを継承している。具志堅が行うシニグ祭りでは、今帰仁城内のレコーラウーニーを参拝するようである。時期は旧暦７月19日のウーニフジ（御船漕）の行事で、今帰仁城跡へ参拝に行き、火の神やイビガナシに航海の安全を祈願する。またレコーラウーニーで船漕ぎの所作を行い、唐船旗をおしたてて、各々の集落のウンジャミ道を通って海岸へ行ったとされる（新城1973)。現在では、簡略化されヌルクムイとヌルヌメーが、区長・書記と共に具志堅集落内のお宮で神衣装を着けて、シニーグの始まりと海上安全・豊漁を今帰仁城跡に向かって祈願するという（仲田2000)。

もう一つは古宇利が行う年中祭祀で現在では行われていないとされるが、旧暦５月に古宇利島内の門中によって今帰仁城内の古宇利殿内火之神の祠を参拝するとされる。

歴(旧暦)	御願の名称	御願の場所	参加者	内　　容
1月1日 午前8時頃	立御願 (元旦)	公民館の縁側 (トゥバシリ)	区長・書記・字有志数人	御嶽に向かって字民の健康、子孫繁栄・五穀豊穣、一年間災厄ないようにと祈願する。花米・お酒・みかん・木炭・巻昆布を供えて御願をする。
2月14日 午後5時頃	二月ウマチー(立御願)	ヌンドゥルーチ	ヌル・神人・区長・書記	ヤマジミ祈願、二月ウマチーは字民に呼びかけて、屋敷内外の清掃をし、白い砂をまいて清める。家内安全・子孫繁栄・無事息災の祈願をする。
2月15日 午後1時頃	(プトゥチウグヮン)	フイドゥンチ (城跡入口)		プトゥチ御願は花木・お酒・供え物・線香をたてて御願をする。
3月14日 午前9時頃	三月ウマチー(麦稲穂御願)	ティラ (親川の上)	男神人(トーバルヤー)・ヌル・神人・区長・書記	親川の近くで浜から持ってきた珊瑚に火をつけない線香をたてて、花米・お酒・供え物をそえて、農作物の豊作、麦稲穂の刈り上げの祈願をティラ(親川の上の方)の方へ向かってタンカーをとる。
3月15日 午後1時頃		フイドゥンチ (城跡入口)		フイドゥンチの殿内に花米・お酒・供え物・線香を五穀豊穣プトゥチ御願をする。
4月14日 午後5時頃	アブシバレー(立御願)	ヌンドゥルーチ	ヌル・神人・区長・書記	畑のアゼ道や田のアゼ道の草刈りや排水溝の清掃、害虫駆除、作物の生育を守る趣旨の行事で、屋敷内外を清掃して白い砂をまく。
4月15日 午後1時頃	プトゥチ御願	フイドゥンチ (城跡入口)		午後は農作業を休み、豊作を祈願してインジュミ(ハッタイ粉)に黒糖を混ぜて、それを食べながら大道(プウミチ)で競馬見物(昭和九年頃まで)をしていたが、今では行われない。花米・お酒・供え物・線香をたててフイドゥンチでプトゥチ御願をする。
5月14日 午後5時頃	プトゥチ御願	ヌンドゥルーチ	ヌル・神人・区長・書記	旧五月五日のプトゥチ御願。花米・お酒・供え物・線香をたてて健康無事息災の祈願をする。
5月15日 午後1時頃		フイドゥンチ	ヌル・神人・区長・書記	フイドゥンチに花米・お酒・供え物・線香をたてて、健康・子孫繁栄などの祈願をする。
午後2時頃	フプウグヮン(嶽ヌ御願)	クバヌ御嶽・拝所	ヌル・神人・区長・書記	拝所でヌル・神人・字民・一般の方々が祈願し、更に御嶽の頂上で下の方の拝所に合図をし、同時に祈願をする。男性禁止の場所である頂上へは字の代表者が登る。
午後3時頃		サカンケーの拝所	字出身者約50人	嶽の御願が終わるとサカンケーの拝所で、各自持参してきたお酒や線香を供えて無事・息災・健康の祈願をする。
5月29日 午後2時頃	プトゥキのイヒャ(子安祈願)	プトゥキヌイヒャ	ヌル・区長・子供の出来ない夫婦	プトゥキヌイヒャの入口は、一坪位の岩屋、斜めに約四メートル位降りると六坪位の部屋がある。三カ所の香炉の前には、小さな花の咲いた珊瑚石が置かれている。区長あるいは書記が浜から珊瑚を集めて、ヌルと共に御願した珊瑚を子供のできない夫婦が祈願をして懐に入れて帰ると子供が授かるという(子安明神)。
6月15日 午前9時頃	六月ウマチー(麦稲穂御願)	ティラ (親川の上)	男神人(トーバルヤー)・区長・書記	親川の近くで浜から持ってきた珊瑚に火をつけない線香をたて、花米・お酒・供え物をして農作物の豊作や麦稲の刈り上げの祈願をティラの方に向かってタンカーをとる。
午後1時頃		フイドゥンチ (城跡入口)	ヌル・神人・区長・書記	フイドゥンチに、花米・お酒・供え物をヌル殿内に供え線香をたて五穀豊穣の祈願をする。
旧盆明けの戌の日 (午後2時頃)	ウーニフジ(御船漕ぎ)	ハタイ原ウーニ、レコーラウーニフジ (城跡入口)	ヌル・神人・区長・書記	今帰仁ウーニと本部ウーニの船石の前で祈願をする。各ウーニへ一メートル位の竹を三本ずつたてて祈願をする。そこでの行事が終わりしだい、城跡入り口のレコーラウーニへ向かう。ヌルが竹のカイを杖にしてヌルと神人は、城跡の平郎門で祈願し、更に引き返してウーニフジ前で待機している他の神人や区長・書記たちの迎えを受けてウーニフジの儀礼は終わる。
旧盆明けの亥の日 (午後2時頃)	ウプユミ(大折目)(城ウイミ)	城跡内のハサギ跡	ヌル・神人・イガミ・男神・サチムイ・他の神人・区長・書記	城跡内のハサギ跡で祭祀を行う。ヌルはカラウカー・今帰仁里主所・ティンチヂ・アマチヂの順に回って拝む。区長と書記は後について、他の神人たちはヌルの巡拝を見守る。巡拝がすむと大庭で区長・書記からバイモチをヌルを始め他の神人たちへ差し上げ、シバンティナの浜へ向かう。浜でカイの変わりの杖をたてて海に向かって拝む。そこで、ミゾギの海水を三回頭につける。終わるとプイヌモー(現在親泊バス停の後)で城跡に向かって城ウイミの終わりを告げる。
旧盆明けの子の日 午後3時頃	シマウイミ(村拝み)	フプサギとハサギンクヮーの両ハサギ	ヌル・神人・区長・書記	フプハサギから祈願し、ハサギンクヮーでも同様な祈願をする。
午後4時頃		シヌグイ道	神人・男神人	男神人と他の神人は、城跡に向かって遙拝する。
8月10日 午後2時頃	城ウイミ(大拝み)	城跡のハサギ跡	ヌル・神人・区長・書記	かんざしと曲玉の箱を開き、村の安全・子孫繁栄・世果報を祈願する。
8月11日 午後2時頃	シマウイミ(村拝み)	両ハサギ	ヌル・神人・区長・書記・門中など	ハサギンクヮーで祈願をし、後門中代表から肉の煮しめた物などをヌルや神人に差し上げる。祈願が終わり次第ヌルや神人・区長・書記はフプハサギ・ウッチハタイの順に祈願する。
午後5時頃		獅子小屋前	字有志、区長・書記	獅子小屋の前で祈願をし、フプミチにで獅子舞と棒の祭祀を行う。ヨーハビ・災厄払い。
8月15日 午後5時頃		大道 (プゥミチ)	一般多数	獅子小屋の前で十五日の祈願をして、プゥミチにて獅子舞いと棒の祭祀を行う(村の安全・世果報祈願)。
9月15日 午後1時頃	フプウガン	フイドゥンチ	ヌル・神人・区長・書記	花米・お酒・供え物・線香をたてて健康・子孫繁栄などの祈願をする。
午後2時頃	ウタキウガン	クバヌ御嶽と下の拝所	ヌル・神人・区長・書記	拝所でヌル・区長・書記・一般の人たちが祈願をし、代表者が更に御嶽の頂上に登り下の方へ合図をし、同時に祈願をする。男性禁止の場所である。
午後3時頃		サカンケー	字民約百人、出身者約50人	サカンケーでは、各自持参にお酒や線香を供えて祈願する(無事・息災・健康を祈願する)。
9月29日 午後2時頃	プトゥキヌイヒャ(子安祈願)	プトゥキヌイヒャ	ヌル・神人・子供の出来ない夫婦	プトゥキヌイヒャの入口は、一坪位の岩屋、斜めに四メートル位降りると六坪位の部屋がある。三カ所の香炉の前には、小さな花の咲いた珊瑚石が置かれている。区長あるいは書記が浜から珊瑚を集めて、ヌルと共に御願した珊瑚を子供の出来ない夫婦が祈願をして懐に入れて帰ると子供が授かるという(子安明神)。
新暦12月24日 午前10時頃	プトゥチ御願(解御願)	ヌンドゥルチ、両アサギ、ウッチハタイ、セークヤーのハー(井戸)、公民館	ヌル・神人・区長・書記	遙拝、ヌンドゥルチで白餅三枚を重ね、その二皿と花米・お酒を供えてクバヌ御嶽・城跡のハサギ跡、カラウカー・今帰仁里主所・ティンチヂ・アマチヂ、更に城跡入口のフイドゥンチ・ウイヌンドゥルーチ・トゥムヌハーニヌルドゥンチの順に祈願する。部落内ではハサギングヮー、フプハサギ・ウッチハタイ・セークヤーヌハー等を祈願して、公民館の縁側でこの一年の無事・息災の感謝の祈願をする。

第2表　今泊区の年中祭祀（今泊誌編集委員会1994）

2. 門中単位で行われている祭祀

門中などの集団だけでなく、神憑りした個人やユタによって参拝を勧められた人がしばしば参拝に訪れるケースもある。ここでは集団として継承されている代表的事例として門中単位の参拝を幾つか紹介する。沖縄では祖先を共通にし父系血縁によって結びつく集団を門中（ムンチュー）と呼んでいる。この門中にはそれぞれが伝承する由来や来歴によって祖先祭祀が行われる。中でも今帰仁上りと呼ばれる参拝行事を行う門中は多い。この参拝行事は現在でも多くの門中によって継承されており、３年、５年、７年を年期として各門中によって執り行われている。中南部などの遠方からの参拝も多く、旧暦の８月頃になると、弁当を持参し大型のバスをチャーターして今帰仁城跡をはじめとした拝所を参拝している。戦前交通網の発達していなかった時代には数日を掛けて参拝したとされ、門中にとって大きな行事であったことが窺える。

今回は各門中に同行して報告するものではなく、既刊の報告を引用し紹介する。このため参拝地の脱落や記載漏れも考えられることをお断りする。第３表に各門中の参拝日程等をとりまとめた。

番号	門中名	市町村名	字名	周期	巡礼コース	供物	備考
1	島袋・大前	南風原町	与那覇	7	山田ノロ殿内・護佐丸父祖の墓・大北墓・百按司墓・赤御墓・今帰仁ヌル殿内・カラウカー・今帰仁城火の神・天つぎあまつぎ・ソイツギ御嶽・エーガー	酒、米、スージガミ（白い紙）、線香、果物	参加費一家族5,500円
2		北中城村	喜舎場	不詳	監守来歴碑（今帰仁城本丸内）・ウフナー（今帰仁城本丸内）・テンチヂ、アマチヂ・受石・カーラー御川・クバン嶽・今泊ヌンドゥルーチ・大川（天地）	不詳	
3		北中城村	安谷屋	不詳	伊波仲門・伊波城跡・伊波按司の墓・ヌル井戸・山田ヌル殿内・山田家（沖縄市山内）・護佐丸の墓（山田）・下の井戸・ウーニシ墓（運天港）・百按司墓・寺窟・今帰仁ヌル殿内・今帰仁城前（二カ所）・今帰仁城内（数カ所）・具志堅上間・具志堅の井戸・諸志の赤御墓	不詳	
4	安里	浦添市	伊祖	7	山田ノロ殿内と山田村（全５カ所）・湧川村（塩を初めて炊いたという家の屋内２カ所、アサギ１カ所）・運天港（為朝の御骨神をまつる墓、百按司墓）・今帰仁ノロ殿内・今帰仁城（城の門前左側にある民家に案内をかける。城内では入口の瓦屋小、カー、上の瓦屋小など計４、５カ所）・クバヌ御嶽・ウーニシ御墓（運天村）・字具志堅の民家の神アサギ（北島角子の実家らしい）・字具志堅のヒージャーガー	重箱料理、酒、花米、餅、饅頭、打紙、シルサイン（白紙）、御香	以前は13年マーイでウマリの女ふくめて4，5人で約一週間かけた。
5	比嘉	浦添市	西原	不詳	今帰仁城（入口・子生し座など3，4カ所）・北島角子の実家（字具志堅）・赤御墓・北中城の舜馬順熙の墓	重箱料理（墓）、花米・ウチャナク・シルカチ（井や嶽）、元祖へは花米・生ソーメン	アガリウマーイと同年、卯年の８月10日に行う。費用はチヂワイして一人150円～200円。祈願目的は体願い。
6	与那嶺	浦添市	当山	13	恩納ノロ殿内・恩納城（井戸２カ所、火の神、按司墓）・今帰仁ノロ殿内・今帰仁ウカー・今帰仁城（カラウカー、火の神、タキグサイ、ウカーの神の計４カ所）・ノロ墓（グスクの向かいの海辺）	ウチカビ、ウジュー、ビンシー、ミレーシン（白紙）	アガリウマーイは７年マール。現在は夏休みに行う。
7	高江洲	読谷村	楚辺	7	今帰仁城跡・大北墓（運天港横のがけ中腹）	不詳	
8	※各門中合同	那覇市	天久	7	久良波山田の宗家・湧川の宗家屋号新里ヤー・下運天の港の墓・親泊のヌル殿内（曲玉所蔵）・※その他不詳	瓶子（お酒）、餅（ウチャヌク）、三つ重一皿、今帰仁城跡にはさらに重箱一組	戦前は６泊７日
9	川田根謝屋（宗家）	東村		3	コウリ祝女の拝所付近・今帰仁祝女拝所付近・クバの御嶽への遙拝所付近・今帰仁城内カラ御門・旧女官すまい所（イビ）・監守来歴碑大庭	不詳	東廻りは５年に一度。以前は数日をかけて巡拝

第３表　各門中が行う今帰仁上り

1 島袋かおり　1997年「島袋門中の「今帰仁上り（ナキジンヌブイ）」について」『南風の杜』南風原文化センター紀要第３号　P48-52
2 北中城村史編纂委員会　1996年『北中城村史』第二巻　民俗編　北中城村役場　p432
3 北中城村史編纂委員会　1996年『北中城村史』第二巻　民俗編　北中城村役場　p432
4 浦添市史編集委員会（編）　1986年『浦添市史』第六巻資料編５　浦添市教育委員会　p521-525
5 浦添市史編集委員会（編）　1986年『浦添市史』第六巻資料編５　浦添市教育委員会　p521-522
6 浦添市史編集委員会（編）　1986年『浦添市史』第六巻資料編５　浦添市教育委員会　p525
7 字楚辺誌編集委員会（編）　1999年『字楚辺誌』民俗編　字楚辺公民館　p233
8 那覇市企画部市史編集室（編）　1979年『那覇市史』資料編　第２巻中の７那覇の民俗　那覇市企画部市史編集室　p543
9 東村史編集委員会（編）　1987年『東村史』第１巻通史編　東村役場　p366